

津市納所町

納所遺跡範囲確認調査報告

1976

三重県文化財連盟

序

埋蔵文化財を積極的に保護活用するには、遺跡とそれを取り巻く自然環境を一体的に考える必要があります。

昭和48年秋から約2カ年半の間、県道雲林院・津線バイパス建設によって実施しました納所遺跡の発掘調査は、本県の歴史を考える上で多大の成果をあげました。今回、さらに範囲確認調査を実施し当時の集落址および水田址を含めた自然環境の推移が明らかになりましたが、当遺跡のみならず埋蔵文化財の現代的活用の資にしたいと思います。

調査に際しては、津市教育委員会・津市安東地区土地改良区事務所をはじめ、地元納所町のかたがたに多大のご協力をいただいたことに対し、深く謝意を表するものであります。

昭和51年3月31日

三重県教育委員会

教育長 清水英明

例　　言

1. 本書は、三重県教育委員会が国庫補助事業（総額3,000,000円補助率50%）として計画し、実施した納所遺跡範囲確認調査の報告書である。
2. 調査は、三重県教育委員会事務局文化課技師伊藤久嗣・吉水康夫と三重県立博物館学芸員藤原寛が担当し、報文作成は伊藤・吉水が担当した。なお、自然環境復原調査については、広島大学総合科学部花粉分析研究会の安田喜憲氏に委託し、その報文を掲載した。
3. 調査については、納所町在住の地主各位に終始格別の御配慮をえたが、区長岡田秀男・同ちえ子氏には全面的な援助をえた。記して謝意を表するものである。
4. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I	発掘調査の経緯	1
II	位置と歴史的環境	2
III	調査の方法	4
IV	調査の結果	5
(1)	層 位	5
(2)	弥生時代包含層の範囲	5
(3)	古墳時代以降の包含層の範囲	6
(4)	出土遺物	6
V	結 語	9
付論 納所遺跡における自然環境復原調査		13

図 版

- P L 1 安濃川流域の主要遺跡
- P L 2 調査地点配置図
- P L 3 断面柱状図
- P L 4 遺跡の範囲
- P L 5 上器実測図
- P L 6 納所遺跡周辺の地形変遷
- P L 7 瓜生堂遺跡周辺の地形変遷
- P L 8 弥生時代の日本列島の花粉ダイアグラム
- P L 9 納所遺跡の花粉ダイアグラム
- P L 10 調査風景
- P L 11 断面
- P L 12 出土遺物
- P L 13 出土遺物

挿 図

- 第1図 地区割模式図
- 第2図 安濃川流域平野の地形図
- 第3図 納所遺跡微地形復原図
- 第4図 納所遺跡周辺の環境復原想定図

表

- 第1表 納所遺跡の標準層位
- 第2表 時代別出土遺物一覧表
- 第3表 納所遺跡花粉・孢子出現率表（第1回）

I 発掘調査の経緯

納所遺跡は、昭和初年に地元の郷土史家であり、三重県の考古学研究の開拓者ともいべき故鈴木敏雄氏によって発見された。⁽¹⁾その後、水田としてほとんど破壊を免れてきたが、昭和46年度からの県営圃場整備事業に伴う排水路建設工事によって相当量の遺物が採集されるに至った。その際、遺跡を東西に横断する地域が、県道雲林院・津線バイパス建設用地として既に三重県土木部によって買収済であることが確認された。この県道バイパスは、昭和50年度に開催を決定した三重国体に伴う道路網整備事業の一環として、近畿自動車道関・久居線に取付く道路であった。

三重県教育委員会事務局文化課は、遺跡保存の立場から以後県土木部道路建設課・津土木事務所と協議を重ねたが、種々の事情によりやむなく昭和48年10月から昭和50年12月にわたる緊急事前発掘調査を実施した。⁽²⁾この調査の経過は終始県内外の注目を集めたが、遺存状態の良好な遺構と多様な出土遺物によって、バイパス建設地域と周辺の遺存部分の保護についての関心が急速に高まった。昭和49年12月、三重の文化財と自然を守る会（代表服部貞藏三重大学教授）によって納所遺跡の保存についての請願が三重県議会文教委員会に提出され、賛成多数で採択されるに至った。請願項目のうち、遺跡範囲確認調査の要望を受けた文化課は、同年12月末に文化庁文化財保護部記念物課と協議を行ない、昭和50年度国庫補助金事業として遺跡範囲確認調査を実施する運びとなった。

次いで昭和51年1月、県文化課と津市教育委員会社会教育課による協議を経て、納所町在住の土地所有者との説明会の後発掘調査に着手した。

調査は、昭和51年1月22日から試掘場設定基準用の測量杭設置を開始し、試掘調査は同年2月17日から3月31日までの間とし、試掘と並行して出土遺物等の整理と報告書作成を実施した。

この間、納所町在住の次の土地所有者各位から、格別の理解ある協力をえた。記して感謝の意を表したい。

永田敬次郎、小林隆一、岡田孝雄、稻垣一雄、稻垣右郎、高野功、川喜田繁雄、若林重雄、岡田真一、稻垣寛治、西川義郎、田中悟、若林源蔵、岡田秀男、井田益、長谷川正嗣、笠井正郎、森川恒秋、永田博、水谷三郎、長谷川弘、小野武夫、川北ひさの、稻垣正男、村田興信、高野ちよ、川北学、若林てる子、辻勉郎、稻垣保一、稻垣伊之

（順不同、敬称略）

註

(1) 鈴木敏雄『津市安東地区考古誌考』 1945

(2) 「納所遺跡調査概報 昭和48年」・「同昭和49年」三重県教育委員会

伊藤久嗣『納所遺跡』（『日本考古学年報』27（1974年版）第Ⅲ部 1976）

II 位置と歴史的環境

伊勢湾へ注ぐ主要河川のうち津市西郊の平野を形成した安濃川は、遠く鈴鹿山脈の南端に水源を持つが、標高820mの経ヶ峰の山峠を形成し、その東麓部を蛇行して安芸郡安濃村を経て津市域を南東に貫流している。安濃川が形成した沖積平野は、ほぼ北西から南西に約10km連なり、納所遺跡の所在する地域は南北約3kmと最も幅広い。遺跡は安濃川が津市市街地の北西端部で大きく蛇行する部分の左岸一帯に位置し、現地形は標高4.5~5.3mの水田地帯であり、行政上は津市納所町に属している。

安濃川流域は、行政上上流から安芸郡芸濃町・同郡安濃村・津市に属し、中勢地方ではとりわけ多数の遺跡が存在し豊かな歴史的環境に恵まれている（PL1）。また、地理的には安濃川左岸に平行する第3紀鮮新世の奄芸層群の見当山低位丘陵、右岸の標高321mの長谷山東麓、さらに長谷山の南側を貫流する岩田川に北西部を区切られた右岸一帯の半田丘陵の三地域に分けられている。

安濃川流域の歴史は、現状では縄文時代中期後半を遡上することはできず、半田丘陵において数ヶ所から縄文土器が採集されているにすぎない。三重県における弥生文化の開始は、土器様式上の前期中段階にあると考えられており、安濃川流域から約12km南方の一志郡三雲村中ノ庄遺跡出土の弥生時代前期の遠賀川系土器が型式的に最も古い。大和盆地から伊賀地方の南部を経て、雲出川に沿って稲作が導入されたのであろうが、以後比較的短期間に主として伊勢湾西岸を北進し、安濃川流域では納所遺跡において前期中段階後半の遠賀川系土器が出土している。このように安濃川流域は三重県下でも早い頃に弥生文化が開花しているが、以後中期後半頃に新たな畿内からの政治的、文化的影響下に納所遺跡周辺を始めとして小遺跡が増加し、この頃製作されたと考えられる扁平鉢式銅鐸1個が半田丘陵の津市神戸から発見されており、大阪府恩智銅鐸と同型鐸であることは広く知られている。さらに後期の地方型銅鐸として注目される三連式銅鐸1個も神戸銅鐸出土地の北西約1kmの津市野田で発見されている。弥生時代中期まで比較的平野部に占地していた諸遺跡は、後期に至るや南北の低位丘陵やその裾部に移動し、ここに歴史的新たな胎動が窺えるが、この頃平野部の方形周溝墓に系譜を引くと考えられる台状墓が南方の半田丘陵周辺の高松・大ヶ瀬で調査されており、最近ではそれらを産み出した集落の諸様相も高松C遺跡などで次第に明らかになってきている。

古墳時代では、古式土師器出土の遺跡が前代に引続いて丘陵部に占地する場合と、再び平野部に戻る場合の二様相があるが、なお古式土師器の編年や分析は大幅に遅れている。一方、古墳は上述の中ノ庄遺跡の北方に当る雲出川流域に筒野・向山・西山の三大前方後方墳が位置し、4世紀後葉から5世紀前葉頃に継続的に築造されたと考えられ、中勢地方では有数の前期古墳である。

安濃川流域では長谷山東麓の片田志袋町に所在する坂本山古墳群が最古と考えられるが、3基の円墳と5基の方形墳からなり、うち円墳1基の墳麓から古式土師器壺・器台が出土し、鉄製武器・工具を副葬した木棺直葬の主体部が検出された。安濃川流域の10数基の前方後円墳については不明な点が多いが、大半は中期から後期に築造された可能性が高い。⁽⁶⁾むしろこの地域の古墳を外形上から特色すれば、方形墳の在り方が注目される。なかでも安濃川中流域の左岸から丘陵を1つ北に越えた場所の安濃村明合に位置する明合古墳は、主墳の一辺約81m、高さ約10m、二段築成の双方中方墳で各段に大型の円筒埴輪を繞らし、5基の陪塚も全て方形墳であり、際立った様相を呈している。古墳時代後期は、群集墳に象徴される時代であるが、安濃川流域は県内でも屈指の長谷山古墳群を擁し、総数400～500基の小円墳が群在するが、盗掘などによって大半が破壊されたとはい精査が急がれる群集墳である。これらに先行する山麓の古墳群のうち、大小2基の横穴式石室を併置した安濃村妙法寺の平田A5号古墳は、直径18m、高さ2.5mの円墳であったが、両石室ともに羨道部が階段状構造をなし南鮮系石室との類似が指摘されている。また、見当山丘陵の君ヶ口古墳は、主体部に横穴式木芯室を作る特異な構造である。古墳時代後期の集落の実態は不明な点が多いが、最近5～6世紀の須恵器・土師器の出土が増加しているので、遺物散布地の調査が進めば解明の糸口が得られるであろう。古墳時代の生産遺跡としては、久居古窯址がこれまで安濃川流域に近いものとして知られていたが、最近ほどは同時期の藤谷埴輪古窯址群二基が半田丘陵で緊急調査された。須恵器窯と類似した形態であったが、須恵質の円筒埴輪以外に人物・家・鶏・馬・盾(駒か)型埴輪もあり5世紀後半の須恵器も少量出土した。今後、同型式の埴輪の分布調査によって、雪出川流域と安濃川流域を結ぶ後期古墳文化の流れの解明が期待される。

奈良時代以降の遺跡は、寺院址・式内社や条里遺構と部分的に前代から継続する集落遺跡が知られているにすぎない。特に県営圃場整備事業による条里遺構の破壊は著しく、地名の変更も多くみられるのであり、現在では調査の遅きに失した場合も多い。とはいへ安濃川流域の歴史的環境はなお豊かであり、弥生時代以降中世に至るまで断続はあるが納所遺跡の位置づけはきわめて重要である。

註

- (1) 谷本親次『中ノ庄道路発掘調査報告』三重県教育委員会 1972
- (2) 棚本社人『三重考古図録』三重県教育委員会 1954
- (3) 谷本親次『高松生垣塙発掘調査報告』津市教育委員会 1970
伊藤久嗣『大ヶ瀬遺跡』(『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』)三重県教育委員会 1973
- (4) 1975年度に津市教育委員会が調査、弥生時代後期前半～古墳時代前期の方形堅穴住居並32軒と台状遺構5ヶ所、方形周溝墓1号が検出された。
- (5) 三重大学歴史研究会『ふびと』20.27 1963.1967年、前掲(2)
- (6) 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会 1970
- (7) 小田泰正ほか『堂山一号墳』安芸郡安濃村教育委員会 1974
- (8) 三重大学歴史研究会『三重県安芸郡明合古墳について』(『ふびと』23 1965)
- (9) 小玉道明『津市長谷山古墳群について』(『三重の文化』15 1958)
- (10) 1974年度に安濃村教育委員会が調査
- (11) 斎室康光『君ヶ口古墳発掘調査報告』津市教育委員会 1974
- (12) 小玉道明・山沢義貞『久居古窯址群発掘調査報告――2号窯・4号窯』三重県教育委員会 1968
- (13) 斎室康光『津市半田藤谷埴輪古窯址群発掘調査概報』津市教育委員会 1976

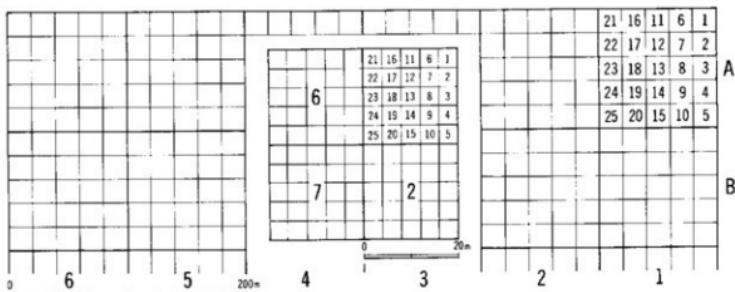
III 調査の方法

納所遺跡の範囲は、昭和45年の中南勢遺跡地図作成時の分布調査によって東西約500m、南北300m以上と推定されていた。したがって今後の学術調査等を考慮し、既応調査地域との関連を明確にした測量基準点を各所に設置した。基準点は、セメント杭（方柱状、60×10cm）22本、コンクリート釘78本、木杭157本の合計257個所である。

基準杭設置に伴い、既応のバイパス地域調査地区において道路の曲折を考慮した地区設定を行なっていたが、今回新たに設定した地区割に統一した。地区割は100m四方を大区画とし、東西を数字、南北をアルファベットで表示した。さらに大区画を20m四方で25に分割し、1～25の番号を付け中区画を表示し、1中区画を4×4mの小区画で25に分割し中区画と同規で1～25の番号を付けた。したがって小区画の表示例は、1A—1—1となる。

調査地点の設定は、当初小区画の $\frac{1}{4}$ の2×2mの範囲を予定していたが、耕運機による開墾と埋戻しを考慮し1×2mとし、合計111個所で水田の長辺にトレンチ長辺が平行するようにした。

調査地点の配置は、既応のバイパス地域調査の結果を考慮し40m各に設定したが、地主との協議の結果必ずしも一定していない（PL2）。さらに、トレンチの深さは、湧水が激しいため弥生時代前期の層を全トレンチで確認すると埋戻し後に耕運機等の埋没が予測されたため、弥生時代中期の遺構面までにせざるをえなかった。したがって今回の調査では、弥生時代中期の遺構確認と、同時代以降の遺物包含層の有無の確認及び層位と土質の観察に留まらざるをえなかった。



第1図 地区割模式図

IV 調査の結果

1 層位 (P L 3・11)

本遺跡の標準層位は、第1表の通りであるが、後述するごとく遺跡が旧安濃川の自然堤防上に立地することから、細部についてはきわめて複雑な様相を呈している。第2層は、少量の古墳時代以降から中世にかけての遺物を包含するもので、直径0.2~0.4cmのマンガン粒の沈着から、同層は長期にわたって乾田ないし畑地であったことが想定される。第3層は、弥生時代各期の土器が混在するいわゆる遺物包含層であり、同層の上半部には水酸化鉄の斑文層が全面に看取された。また、第3層の分布範囲内に限定して、直下に遺構を乗せる第4層が分布しているのも特徴的である。

第4層は、層上面で遺構が無数に検出されているので弥生時代の生活面であるが、全般的にゆるやかな起伏がみられる。第5層は、弥生時代前期の自然流水路に当る地域にのみ堆積したものである。同層の上部では伊勢湾西岸地方で前期終末に比定されている赤褐色のいわゆる遠賀川系亞式土器が多量に出土し、帯状の黄褐色砂質層をはさんだ同層の下部からは、多量の前期中段階の上器と各種の木製遺物が出土している。第6層は、無遺物の地山であり、同層の分布と起伏は納所遺跡における旧地形復原の材料となる。

層名	色調・土質	層厚	遺物と特色
第1層	黒色砂質土	30cm	耕作土・床土
第2層	灰褐色砂質土	20~40	須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗 全体に褐色のマンガン粒が沈着
第3層	茶褐色砂混り粘質土	40~60	弥生土器の包含層、層の上半部に水酸化鉄が沈着
第4層	灰褐色砂質土	30~50	層上面に遺構検出（第1~4様式）
第5層	青灰色粘土	50~80	弥生前期の自然流水路（埋積浅谷）
第6層	茶褐色砂疊		地山、本層の下方に暗青色含貝の有機質粘土層が堆積

第1表 納所遺跡の標準層位

2 弥生時代の包含層の範囲 (P L 4)

弥生時代の遺跡範囲については、同時代の包含層の分布範囲が集落を乗せる居住地域推定の基準となる。同時代の包含層の分布範囲は、東西約440m南北約350m、面積約154,000m²で、ほぼ橢円形を呈している。包含層の厚さは、中央部が最も厚く約50~60cmを計る個所もあるが、周縁部は次第に薄くなり土器量も並行して減少する傾向がみられた。同様に同層の直下に当る第4層の直上から掘り込まれた弥生時代前・中期の遺構の存在も、同層の中央部では濃密であるが、周縁

部では稀薄になる傾向が看取された。さらに第4層の分布をみると、ほぼ第3層と重複するが周縁部では層厚が薄くなるとともに、分布範囲の西・南・東側では中央部から離れるにしたがって次第に粘土質を帯びる傾向がみられた。調査個所の西北部では、第2層の灰褐色砂質土直下の海拔約4.8mの付近から暗青灰色粘土の都厚い堆積層を確認した。この堆積層は、有機質を多量に含む環元土壌であり、分布の東縁は弥生時代遺物包含層の西縁に接していることをポーリング棒による探査で確認した。南西部では、同層はや、砂混りの灰黒色土層として続いている。さらに、両層のほぼ中央に当る部分では、全くこれら青灰色の粘土層がみられず、茶褐色砂層が堆積していた。なお、弥生時代包含層の北東部でも北西部一帯に分布する青灰色粘土層が小範囲に分布している。以上を総合すると、弥生時代を通じて納所遺跡の集落を乗せる微高地の西部に低湿地がひろがっていたのであり、北東部にも小さな低湿地が存在しているのである。西部の低湿地のさらに西へのひろがりについては、今回の調査では明確にしえなかつたが、地元古老人の言によれば、さらに約300m西方へ続くとのことであり、東西約500mの範囲にわたって低湿地が存在しているのである。これら低湿地の形成については、自然環境復原の項で詳述されるが、かつては連続していたのかもしれない。

3 古墳時代以降の包含層の範囲（PL 4）

古墳時代以降の包含層は、第2層の灰褐色砂質土であるが、そのうち遺物包含層の範囲は限定されている。すなわち、第2層は調査全域に分布しているが、そのうち包含層は弥生時代包含層の全域と重複してさらに拡大し、東西約560m、南北約500m、面積約280,000m²の範囲にわたり、隅丸方形に近い。遺物は全般的に少量で、中央部よりも周縁部に偏在している。このことは、近年の圃場整備の際中央部の土を削平して周縁部に土盛りした結果であるかもしれない。上述のごとくバイパス建設地域の調査では、古墳時代以降の遺構は調査地区の西端で幅約8mの自然河流と、東端部で多量の土師器が出土した溝を含めた数条の溝と掘立柱建物の他は顕著ではない。これらの遺構は、層位的に弥生時代中期の遺構面とはほぼ同一ないしや、高い層位に営まれたものであるが、中央部の弥生時代中期の豊富な遺構群が存在した個所には全く確認していない。なお、第2層は包含層の西部へ延長し、低湿地の上部に重なっているが、遺物は低湿地の東縁部で若干出土するのみであった。

4 出土遺物（PL 5、12、13）

前述のような理由によってトレンチの単位面積を最小限に留めたため、遺物の出土量は比較的小量であったが58ヶ所で出土をみた。これらは弥生時代前期から鎌倉・室町時代に至る各時代のものがみられる。しかし、おおまかに時期判別ができるものの、小片が多いため実測の可能なものは少ない。

なお、各調査地点での出土遺物の時代区分を第2表にまとめ、実測図のあるものはその番号を

各調査地点の備考に入れた。しかし、各調査地点によって遺物出土量に大きな差があり、数個の細片が出土したのみの地点もある。このため数量を度外視して各時代に属する遺物の有無を表示するにとどまった。また、時代区分についてもよりこまかな時期判別の可能なものもみられるが、全般にわたって表示したいためおおまかな時代別に留めた。

(1) いわゆる亜流の遠賀川式といわれる壺である。器高に比して腹径は大きく、かつ最大径部位が比較的下にある。口頸部は欠失しており不明であるが胴部の文様は多条の籠描き沈線を基本とし、上7本下6本の横線の間には左下がり右下がりの交互に斜線が施され、最大径部付近には押圧の貼り付け凸帯とその下に2本の沈線が見られる。底部は厚く突出して安定している。

(2) 壺の口縁部片で頸部からゆるやかに外反し、その端部はナデによって調整され上方に立ち上がっている。その他の部分は不規則な方向で刷毛によって調整されている。

(3～5) 内弯する口縁部をもつ壺の口頸部片である。文様のうえでは内傾部分に縱方向の籠による刻目を入れ、その上に3条の籠描き沈線を加え、さらにその上に円形浮文8ヶを施し稜部には櫛状工具による刻目を施したもの(3)、棱線は明確でなく櫛状工具による刺突のみのもの(4)、波状文を施したもの(5)など様々である。また(3・5)は頸部に沈線が施され肩部とを限っている。

(6) 大きく外にひらきその端部は下に垂れる口縁部をもつ比較的大型の壺で、口径24.5cm器高45cmを測る。口縁端部は櫛描き波状文が施され、内側には櫛の刺突による列点がみられる。頸部は2条の簾状文によって体部と限られ、以下横線、波状文、斜格子文、波状文という構成で施文されている。しかしながら、この施文原体は不明確なもので、施文も粗雑である。また腹部から底部にかけてと頸部内面とは横方向の籠磨きによってていねいに調整されている。

(7) 口縁部が大きく外にひらく壺で口径15cm、器高31.5cmを測る。全体に風化がひどく文様、調整は不明瞭であるが頸部から底部付近まで刷毛によって調整され、その上に頸部から最大径部にかけて横線が施され波状文で終る。また、口縁部内側には扇形文らしい痕跡がみられるが明確ではない。

(8) 円板を貼り付けたような様相を示す厚い底部をもつ壺である。外面の調整は風化がひどいため不明であるが、内面は縱方向の刷毛による調整が認められる。

(9) 径13.5cm、器高3.5cmを測る赤褐色を呈す杯の破片で、口縁部はていねいに横ナデされている。底部は指によっておさえたのみで凹凸が目立つ。

(10) 径13cm、器高3cmを測る灰釉の皿である。作りは比較的厚手で端部は短く外反する。底部は糸切りであるが水引きによってほとんど消されている。高台は貼り付けが明瞭で、やや外に張りしっかりしている。施釉方法は4回か5回の浸しによって口縁部のみに施釉している。

(11) 内面のみ黒色を呈すいわゆる黒色上器の小片で器壁は非常にうすい。内外面ともに風化がひどく調整は不明である。

(12) 灰釉陶器の破片と考えられるもので、底部は非常に厚く糸切り痕をのこす。高台は断面三

角形を呈し低く小さい。内面には煤が付着しており破損部の断面にも及ぶことから一部の破損以後の使用によるものであろう。

(13) 山茶椀の底部片で糸切り痕をのこす。胎土はやや砂粒を多く含み、内面の作りは粗雑である。高台は大きく高い。

(14) 径23cmを測る甕の小片である。胎土は砂粒を多く含み、作りも内面は箝削りされているものの外面は粗雑で凸凹が目立つ。三重県下でも数例とはいえその出土例が知られているが、尾張・三河地方を中心として平安時代後期に煮沸用具として使用されたものといわれる。

調査地點	時代	弥生	古墳	奈良 平安	鎌倉 以後	備考	調査地點		時代	弥生	古墳	奈良 平安	鎌倉 以後	備考
1 E-11-5				○			5 F-12-5	○						
1 E-13-5				○			5 G-5-10	○						
2 D-7-15				○			5 G-15-5	○						6・7
2 D-9-15			○	○			5 G-23-5	○						3
2 D-19-10	○			○			5 G-25-5	○						
2 E-8-5	○			○			5 H-2-6	○					○	
2 E-18-5				○			5 H-12-4	○						
2 F-17-5		○	○				5 H-22-4	○						
2 G-20-5	○	○					6 C-10-5	○						
3 D-14-5	○	○	○				6 D-7-5	○					○	
3 E-21-5	○	○		○	12		6 D-9-5	○					○	
3 F-4-5				○			6 E-6-5	○	○				○	
3 F-6-24				○	13		6 E-8-5	○	○					1
3 F-24-5	○			○	2		6 E-16-5	○					○	瓦片
3 G-18-25	○		○		5-10-11		6 E-18-5	○					○	瓦片
3 G-20-25	○						6 F-17-5	○	○					8
4 D-7-20	○						6 G-8-5	○						
4 D-9-20		○	○	○	9		6 G-10-5	○						
4 D-17-10	○						6 G-18-5	○						
4 D-19-10	○						7 D-11-6	○				○	14	
4 F-17-5	○			○			7 D-12-10						○	
4 H-17-1	○			○			7 D-14-10						○	
5 D-21-3	○						7 D-21-6			○				
5 D-22-5		○		○		埴輪片	7 G-21-5	○	○				○	
5 E-11-5	○	○					7 G-23-5	○						
5 E-13-5	○			○	4		8 F-7-5			○				
5 E-21-5	○	○		○			8 G-6-5			○	○			黒色土器
5 E-23-5	○						8 G-8-5					○		
5 F-2-5	○			○			8 G-20-5	○						

第2表 時代別出土遺物一覧表

V 結 語

今回の範囲確認調査によって、納所遺跡の性格を究明する上できわめて有意義な成果を数多く得ることができた。以下その成果をまとめることにするが、今後の県道バイパス建設地域内の遺構・遺物についての報告書作成段階で、訂正・付加される部分が多いことを最初に断っておきたい。

さて、今回の最大の成果は、弥生時代包含層の西側に広大な有機質粘土層からなる低湿地が存在することを確認したことである。本書付論の自然環境復原調査の結果でも、稻などの禾本科植物の存在が立証された。我が国における弥生時代初期農業の占地が、低湿地に多い環元土であるグライ土壤であることは既に解明されている。⁽¹⁾たとえば岡山県津島グランド遺跡では、幅約10m、長さ約40mにわたる帯状の低湿地が花粉分析調査の結果弥生時代前期の水田址であることが立証⁽²⁾されている。同遺跡では住居址と方形周溝墓(?)を乗せる微高地の東方約5~15mで低湿地に達するが、弥生時代前期の水田址は遺跡の全容が未解明な現段階であっても、初期農業についてきわめて重要な示唆を与えているのである。

納所遺跡周縁の低湿地のうち、西側の湿地はほぼ東西500m、南北500mの範囲に分布するが、東北側の湿地は小規模ではあるが可耕地である。主要な水田地域が西側の湿地に求めうることはほぼ誤りなく、集落を構成する居住空間としての住居址を中心とした地域、定住に伴って累積的に形成される墓域、さらにそれらの原点ともいべき生産の場である水田の三大構成要素の全てを確認できたことは大きな成果であった。しかしながら、西側低湿地のどの程度の範囲が実際に水田として利用されていたかについて、また時期的な変遷についての具体的な明確さに水田の性質などについては将来に残された重要な課題である。

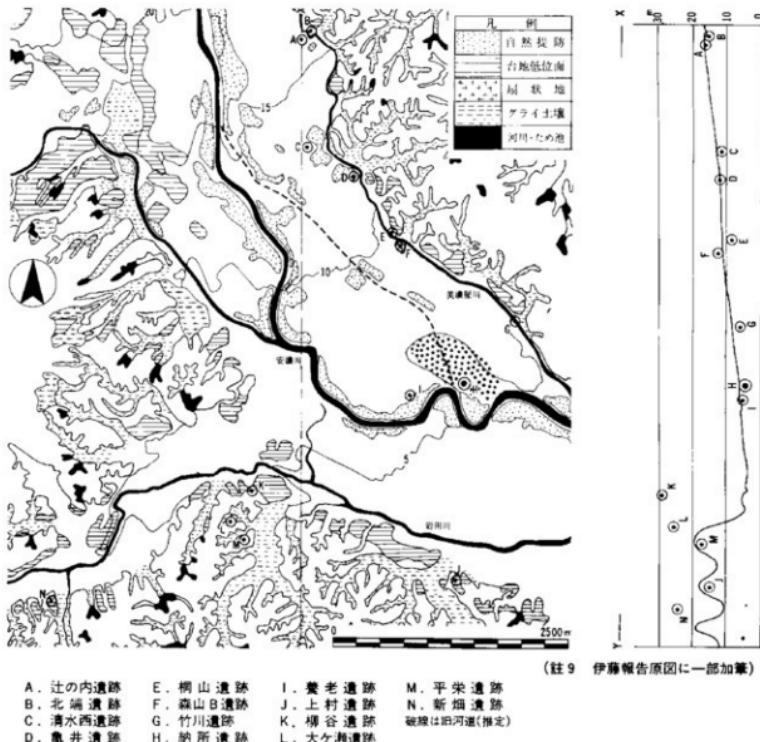
さて、この低湿地の形成が、繩文時代後期以降の海退現象に起因することは自然環境復原調査で検討されている。以下ではさらに微視的に安濃川流域平野の地形から、その形成と調査の資料とを対照させて検討することにしたい。

第2図によると、現安濃川流域には数条の自然堤防が発達している。また、北方の見当山低位丘陵縁辺部には、美濃屋川右岸に自然堤防がみられる。この両川の自然堤防の中間に、断続した自然堤防がみられるが、これはおそらく安濃川の一支流による形成と想定される。その理由は明瞭で、現安濃川の中流域に近接して自然堤防の端部がはじまることと、5~15mの等高線の屈曲状態から美濃屋川右岸に微高地が続き、それが旧安濃川と旧美濃川の堤防地帯として境を形成したと考えてよいと思われるからである。この想定に誤りがなければ、納所集落の北西部に発達した低湿地は、旧安濃川の流域に形成されたものと考えられよう。

低湿地へのボーリング棒探査によると、地表下約2mで固く締った砂層に達している。おそら

くこの砂層の下方に暗青色含貝の有機質粘土層が堆積しているのであるが、この砂層は遺跡中央部で地山としている酸化した茶褐色砂礫層に続くものであろう。

弥生時代前期の遺構のうち住居址は未検出であるが、中期の遺構面と重複するというバイパス地域調査の結果によると、こうした弥生時代前期の居住地域に当る微高地の形成は、繩文時代後・晚期の海退現象と対応するものである。こうした微高地によって東側を遮断された旧安濃川の一支部は、次第に蛇行するとともにさらに上流での流路変更を繰り返し、主流は比較的早い時期に流路を南へ変えていったものと考えられる。いま納所遺跡を通る標高5mの等高線は、まさにこの低湿地の縁辺部に沿って大きく北西へ弯曲しているが、いわば離れ湖状に残された部分が低湿地を形成したのである。弥生時代前期においては、この低湿地を東西に貫流する一本の埋積浅谷が形成されており、その最下層の砂礫層の上面に繩文晩期土器片が若干包含され、さらにその上



第2図 安濃川流域平野の地形図 (1:50000)

部に堆積した青灰色有機質粘土層から、弥生時代前期中段階の多量の土器とともに各種の木製農耕具が出土している。未製品を含むとはいへこれら農耕具の遺存状態は、集落の北西部にひらけた低湿地における初期農業の姿を如実に示しているのである。

今回の調査のもう一点の成果として、弥生時代遺物包含層の分布範囲が明確になったことがあげられる。上述のごとく、この包含層の直下には主として弥生時代前～中期の遺構が明瞭に存在するので、周縁部では若干の疎密がみられるものの、東西約440m・南北約350m・面積約154,000m²⁽³⁾の範囲を居住地域と想定しうるのである。

現在、三重県下における弥生時代遺跡のうち、主要遺跡の面積を相互に比較するには充分な資料が揃っていないが、前・中期では三雲村中ノ庄遺跡の約100,000m²、鈴鹿市上筭田遺跡の約120,000m²、永井遺跡の約4,000m²などと比較しても納所遺跡は大型である。さらに弥生時代に限っても、若干の疎密はあるものの前期中頃から後期末頃まで一貫して継続していることが明らかとなっている。さらに遺構・遺物の保存状態はきわめて良好であり、伊勢湾西岸における初期農業の解明とその展開を具体的に解明しうるきわめて重要な遺跡である。納所遺跡は、これまで安濃川流域における換点的集落として位置づけられてきたが、この具体的な内容についてはなお未解明の分野が多い。今回の調査によってほぼ明らかとなった遺物包含層の分布範囲と低湿地帯（可耕地）を総合すると、東西約1,000m、南北約450m、面積約450,000m²と考えられ、三重県以西の弥生時代大型遺跡と比較してもなんら遜色はない。今後の学術調査によって遺跡の実体と性格がさらに究明されることが強く望まれるのである。

古墳時代の納所遺跡は、包含層のひろがりからみて弥生時代よりもさらに拡大するかのごとくである。しかしながら、古墳時代以降の遺構が少いことなどから、むしろ周辺部に新たな開拓を目指して分村した結果を反映しているのかもしれない。このことは弥生時代中期末以降の海面上界に対応した安濃川の氾濫による自然堤防の形成を考慮すれば、古墳時代以降の包含層のひろがりも氾濫によったものと推定できないでもない。バイパス地域調査において、西端部の古墳時代以降の厚い堆積土中から出土した蓮華文複弁軒丸瓦も、こうした氾濫による移動を想定させるものである。

さて、調査地点の北東部から数点の円筒埴輪片が出土しているが、この地域には「大塚」という字名が残り、明治末年頃には小高い段状の部分が畑中に数ヶ所存在したという古の言があるので、かつてこの付近に古墳が存在していた可能性もなくはない。さらに古墳時代後期の多量の須恵器・土師器がバイパス地域の調査で出土しているが、これらのこととは上述の分村と一見矛盾するかのようであるが、これらの古墳時代集落は、安濃川のさらに上流域や北方の見当山低位丘陵の裾部に当る美濃尾川流域において、同じ頃急激に増加する遺跡群との関連でとらえるべきであろう。

現在、古墳時代後期頃までに安濃川流域の沖積平野が殆んど開拓されたのではないかと考えられているが、この時期の開拓を基礎にしてはじめて流域一帯の整然とした条里区割の大工事が施

行できたのである。安濃川流域の条里制の復原については、津市内の古刹四天王寺の薬師如来像胎内から発見された康平5年（1062）の「民部田所 勘定四天王寺領田畠事」⁰⁸が唯一の文献であるが、県営圃場整備事業以前の納所町周辺の字名に「大坪」・「二ノ坪」・「四ノ坪」・「一丁田」を拾うことができ、半折型の区画が古図から読み取れる。納所遺跡の北部に当る旧県道の屈折部も、復原した条里を重ねるとちょうど町四方の条・里の境に該当している。

このように古墳時代以降中世に至るまでの納所遺跡の環境は、乾燥した田畠として嘗々と変転していくのであり、調査地域の全域に分布する第2層の灰褐色砂質土層中の褐色マンガン粒の沈着が裏付けているのである。

以上簡単に今回の調査成果を総括したが、三重県内の弥生時代遺跡約400個所の中で、集落・墓地・水田の所在を確認した唯一の遺跡として、納所遺跡が内包する重要性は多岐にわたるものがある。いうまでもなく遺跡の重要性は、その実体や性格が明らかになることによって立証されるのである以上、納所遺跡が豊かな水田として破壊されることなく永久に保存されるべきであり、さらに本遺跡の未知なる価値を解明する新たな出発点として、今回の範囲確認調査を位置づけることにしたい。

註

- (1) 八賀 晋「古代における水田開発」（『日本史研究』第96号 1968）
- (2) 隆 利雄「岡山県津島遺跡の花粉学的研究」（『考古学研究』第16巻第2号 1969）
春成秀爾「津島遺跡ノート—弥生時代水田址に関して」（『歴史手帳』第2巻第2号 1974）
- (3) これまで遺構面より上部に堆積した「遺物包含層」については、個々の遺物を抽出記述する傾向があった。長期における同層の埋構にも生活史が反映している以上、同層中の複数な遺物群を下部遺構と対応させて統一的に把握する整理方法が、遺跡の全像把握に不可欠な課題であることを提起しておきたい。
- (4) 谷本綱次「中ノ庄遺跡発掘調査報告」 三重県教育委員会 1972
- (5) 仲見秀雄・萬田幸成・大塚範久「上箕田」 第1次・第2次調査 猪鹿市教育委員会 1961・1970
谷本綱次「昭和45年度県営圃場整備事業地内上箕田遺跡調査概報」 三重県教育委員会 1971
- (6) 小玉道明・伊藤清「木井遺跡発掘調査報告」 四日市市教育委員会 1973
- (7) 板付—約50万m²、津島—約96万m²、池上—約100万m²、四ツ池—50万m²、安満50万m²、瓜生堂—約64万m²
- (8) 鈴木敏雄「三重県古瓦図録」 第18版(改)見廃寺出土軒丸瓦と同型 1933
- (9) 伊藤克幸「安芸郡安濃村・辻の内遺跡—付—北端遺跡」 安濃村教育委員会 1975
- 08 「平安遺文」第3巻980

—付論—

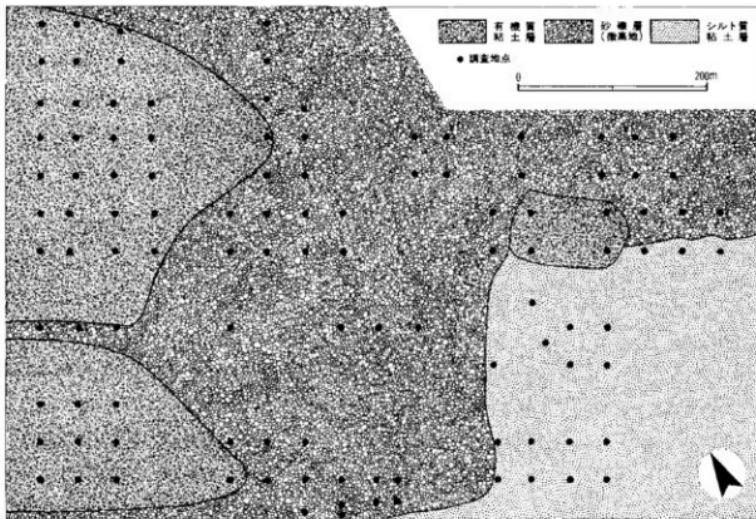
納所遺跡における自然環境復原調査

I 地形環境の変遷

納所遺跡の範囲確認調査で設定されたトレンチの土層断面から、遺跡周辺の微地形の大略を復原することができた。第3図は遺物包含層をのせる茶褐色の砂礫層が検出されたトレンチ、褐色シルト質粘土層が検出されたトレンチ、ならびに遺物包含層をともなわない暗灰色の有機質粘土層が検出されたトレンチに注目して描いた弥生時代の微地形の復原図である。遺跡は南北に走る砂礫層の上部に立地し、砂礫層の西側には暗青灰色有機質粘土層を堆積する低湿地が存在した。また砂礫層の高まりの東部には同色のシルト質粘土層が堆積するやや低湿な部分が存在した。

こうした納所遺跡の弥生時代の地形環境をより深く理解するには、弥生時代以前とそれ以降を含めた地形変遷史の中に、この遺跡の立地を位置づける必要がある。

納所遺跡の地表下2.5~3m前後からは、暗青色含貝の有機質粘土層が広く検出されている。この粘土層が堆積した当時は、納所遺跡周辺はラグーンの環境にあったと考えられる。ところがその後、茶褐色の砂礫層・褐色シルト質粘土層が堆積するような汎湿原の環境がおとずれた。こう



第3図 納所遺跡の微地形復原図

した環境の変化を引き起した原因は、海面の低下にその原因が求められる。日本列島においては、目下のところ縄文海進といわれる高海面期があったことがほぼ定説となっている。この時代の海面は現在より2~3m高位にあったとみられる。納所遺跡の地表下2m前後から検出された貝貝の粘土層はこの時代の末期の堆積による可能性が高い。一方、縄文時代後期以降、しだいに海面は低下の傾向に向い、縄文時代晚期には確実に現在より低位置に達した。こうした低位の基準面に対応して、納所遺跡周辺では砂礫層・砂層を堆積するような氾濫原の環境が訪れた。

納所遺跡に弥生時代前期の人々が居住を開始したのはまさにこうした時であった。人々は微高地の砂礫層の上面に住居をかまえ、西側には低湿地が広がっていた。遺跡の立地する砂礫層を切って埋積浅谷に相当する河谷（自然流水路）が流下していた（PL6）。

ところが弥生時代中期末、突如遺跡は放棄され、遺跡は100cm前後の褐色シルト層・シルト質砂層で埋積される。この褐色シルト層・シルト質砂層はいわゆる自然堤防堆積物である。こうした急速な自然堤防を発達させるような堆積環境の変化は、弥生時代中期末以降の海面の上昇と大きな関連があると考えられる。弥生時代前期・中期といまだ現在より低位にあった海面は、弥生時代中期末以降しだいに上昇傾向に入り、弥生時代後期にはほぼ現在に近い状態に達したことが大阪府河内平野の研究で明らかになった（安田1975a）。納所遺跡における自然堤防形成期の開始期も大阪の河内平野と時代を同じくすることから、海面の上昇と大きなかかわりを持っていることが考えられる。

納所遺跡ではこの自然堤防堆積物を侵蝕して古墳時代の溝が形成されている。このことは古墳時代に入って再び海面がやや低下したことを想定させる。しかしこの点についてはいまだ事例が少なく今後の課題として残される。

以上の如き納所遺跡周辺の地形環境の変遷を模式的に描くとPL6の如くなる。また納所遺跡との比較の意味でPL7には大阪湾沿岸の河内平野における瓜生堂遺跡の事例を示した。

II 植生環境の変遷

日本列島における晩氷期以降の花粉帯は、下部よりL時代（B.P.15,000?~10,500年）、RⅠ時代（B.P.10,500~9,500年）、RⅡ時代（B.P.9,500~3,000年）、RⅢa時代（B.P.3,000~1,500年）、RⅢb時代（B.P.1,500~現在）に区分される（安田1974）。この花粉フローラの変化からみた時代区分にしたがえば、納所遺跡の人々が居住した時代はRⅢa時代にあたる。このRⅢa時代の特色は気候が冷涼、湿潤化したことにある。PL8はこの時代の日本各地の花粉ダイアグラムを集成したものである。東日本の太平洋岸の沖積平野の分析結果では、このRⅢa時代に入るとハンノキ属の花粉が急増してくる。このことは縄文時代晚期の海面の低下によって、沖積平野にはハンノキ林の生育するような湿原が形成されたことを示す。東日本の太平洋岸に最初にたどりついた弥生時代の人々が目にした景観は、沖積平野に展開するハンノキ林であったろう。これに対し、東日本の日本海側の沖積平野から中部山岳の一部をへて東海地方の太平洋岸に

AP (樹木花粉)	B' 852	B' 853	B' 814	B' 818	B' 852	B' 853	B' 814	B' 818	B' 852	B' 853	B' 814	B' 818	
(モミ属)	58	32.8	42	17.9	10	5.6	14	9.2	Cornus	(ミズキ属)	■ 1	■ 1	■ 1
(ツガ属)	5	2.8	2	0.9	5	2.8	2	1.3	Syrrax	(エゾノキ属)	—	—	—
(Pinus Type)	2	1.1	16	6.8	11	6.2	10	6.6	Loniera	(スイカズラ属)	—	—	—
(ヤギ属)	2	1.1	3	1.3	6	3.4	1	0.7	Rosaceae	(スベラ科)	1	0.6	—
(コワヤマキ属)	4	2.3	5	2.1	9	5.1	3	2.0	Rhus	(ツルシ属)	—	—	—
Cryptomeria	5	2.8	14	6.0	20	11.2	19	12.5	AP TOTAL	—	—	—	1
Chamaecyparis	(ヒノキ属)	—	—	1	0.6	—	—	—	NAP (非樹木花粉・胞子)	177	235	178	156
Salix	(ナギ属)	—	—	1	0.4	—	—	—	B' 852	B' 853	B' 814	B' 818	
Juglans	(オニグルミ属)	2	1.1	1	0.4	7	3.9	—	Gramineae(L)	(イネ科)	—	—	—
Myrica	(ヤマモモ属)	—	—	2	0.9	—	—	—	Gramineae(S)	(イネ科)	27	15.3	52
Betula	(カバノキ属)	—	—	3	1.3	2	1.1	1	Composite	(オオナミ属)	—	—	1
Alnus	(ハシノキ属)	—	—	2	0.9	2	1.1	1	Xanthium	(ヨモギ属)	—	—	—
Carpinus	(クマシテ属)	2	1.1	2	0.9	1	0.6	2	Artemisia	(イヌタデ属)	2	1.1	6
Corylus	(ハシバミ属)	8	4.5	3	1.3	2	1.1	1	Persicaria	(セリ科)	7	4.0	—
Castanea-Castanopsis	(カシ属)	2	1.1	14	6.0	10	5.6	4	Umbelliferae	(カシ科)	2	1.1	—
Fagus	(ブナ属)	—	—	2	0.9	3	1.7	1	Caryophyllaceae	(カシ科)	—	—	1
Quercus	(コナラ属)	5	2.8	8	3.4	9	5.1	10	Typha	(ダマスカス科)	—	—	1
Cyclobalanopsis	(常綠カレ属)	60	33.9	92	39.1	55	30.9	67	Nuphar	(コウホネ属)	—	—	4
Celtis-Aphananthe	(エノキ属)	1	0.6	3	1.3	13	7.3	4	Cyperaceae	(カツラギ科)	7	4.0	2
Ulmus	(ニレ属)	7	4.0	9	3.8	4	2.2	2.6	Trapa	(ヒシ属)	—	—	39
Zelkova	(ケヤキ属)	5	2.8	3	1.3	—	—	4	Iridaceae	(アヤメ科)	—	—	16.6
Acer	(エデ属)	2	1.1	—	—	—	—	—	Myrsinaceae	(キンギョモ属)	—	—	—
Prunus	(サクラ属)	—	—	1	0.4	—	—	1	Rumex	(ギンギシ属)	—	—	6
Fraxinus	(トネリコ属)	1	0.6	1	0.4	1	0.6	—	Liliaceae	(ギンギリ科)	—	—	1
Leguminosae	(マメ科)	—	—	—	—	1	0.6	1	Ceratopteris	(ミズワラビ属)	—	—	0.9
Ligustrum	(ネズミモチ属)	—	—	—	—	1	0.6	1	Osmunda	(ゼンマイ属)	3	1.7	—
Elaeagnus	(グミ属)	1	0.6	1	0.4	—	—	—	Polypodiaceae	(ワラボシ科)	62	35.0	58
Mallotus	(アカダマシワ属)	—	—	—	—	1	0.6	—	Lycopodiaceae	(カクタス科)	10	5.6	2
Sapind	(シラキ属)	—	—	—	—	1	0.6	2	NAP TOTAL	120	120	213	159
Aesculus	(トナノキ属)	2	1.1	4	1.7	2	1.1	—	ΣAP/ΣNAP(%)	55.6/40.4	66.2/33.8	45.5/54.5	49.5/50.5
Tilia	(シナノキ属)	1	0.6	—	—	—	—	—	注 B'814-B'852+樹木花粉 NAP(%)はAP TOTALを意味する	—	—	—	—

第3表 樹木花粉・孢子出現率表(第1回)

かけては、この時代に入るとスギ属の花粉が増加する。スギ属の増加は気候が湿润化した証拠の一つと考えられている（塚田1967）。三重県上箕田遺跡の分析結果でも、常緑カシ属とともにこのスギ属が高い出現率を示した（安田1973）。その最も顯著な事例は登呂、山木の両遺跡である。スギの根株が遺跡周辺から多く発見され、利用材もスギ材が多い。このことは、これらの地域において弥生時代の人々が最もみじかに接した木がスギであったことを示している。一方、大阪以西の西日本一帯では、この時代はエノキ、ムクノキ属の増加で特色づけられる。エノキ、ムクノキ属は常緑広葉樹林帶の中で、低湿な土壤条件のより低地に生育する。北九州や大阪などの弥生文化の中心地の人々が沖積平野に進出し、まず最初にみじかに接した大木はこのエノキ、ムクノキではなかったかと考えられる。大阪の池上遺跡で大量のムクノキの果実が検出されている（粉川1971）ことはこのことをうらづけている。

以上の如く、弥生時代の納所遺跡の人々が居住した当時の日本列島の気候は現在よりはやや冷涼でかつ湿润であったと考えられる。水田稲作農業を行なう弥生時代の人々にとって最も大きな影響を持ったのは沖積平野の植生である。この時代東日本の太平洋岸の沖積平野にはハンノキ林が、日本海側と太平洋岸の一部、東海地方にかけての沖積平野にはスギ林が、大阪以西の西日本一帯の沖積平野にはエノキ、ムクノキで特色づけられる森林が優勢であった（PL 8）。こうした沖積平野の植生が弥生文化にどのようなかかわりを持ったかについては、一部報告した（安田1975 b）。

さらに目を細かにむけて、納所遺跡周辺のローカルな植生を考察する必要がある。この点についてはバイパス建設に伴う納所遺跡の調査各地点で採取した土壤の花粉分析が完全に終了していないので明白な結果を提出することはできないが、その一部を第3表、PL 9に示した。正確な立論はさけるが、これまでの分析結果からみて、遺跡の立地する砂礫層の上面にはイネ科、ヨモギ属、タデ科、セリ科などの草本類、ウラボシ科、ヒカゲノカズラ科などの羊歯類が生育し、砂礫背後の湿地周辺にはスギ林が一部生育し、湿地にはイネ科、カヤツリグサ科などとともに、ヒシ属、コウホネ属、オモダカ科などが生育していたと考えられる。遺跡周辺の丘陵には常緑カシ属、シイノキ属などの常緑広葉樹林がうっそうと繁茂していた。こうした納所遺跡の環境復原図を描くと第4図の如くなる。この復原想定図はあくまでも現時点でのものであり、今後分析結果が増加するにつれより詳細なものが描けるであろう。

（安田喜憲）



第4図 納所遺跡周辺の環境復原想定図

参考文献

- 鈴川昭平 (1971) : 池上遺跡出土の植物種子類について「第2阪和国道発掘調査報告書4」P.P., 57~64
塙田松雄 (1967) : 過去1万2千年間:日本の植生変遷史 I 「植物学雑誌89」P.P., 323~336
安田喜憲 (1973) : 二重版上箕田道路における弥生時代の自然環境の変遷と人類「人文地理25」P.P., 1~24
安田喜憲 (1974) : 日本列島における晩氷期以降の植生変遷と人類の居住「第四紀研究13」P.P., 106~134
安田喜憲 (1975a) : 花粉分析等による河内平野の自然環境の変遷「大阪文化財センター調査報告書10」P.P., 25~47
安田喜憲 (1975b) : 弥生時代遺跡の花粉学的研究 立命館文学, 358, 359, P.P., 37~91

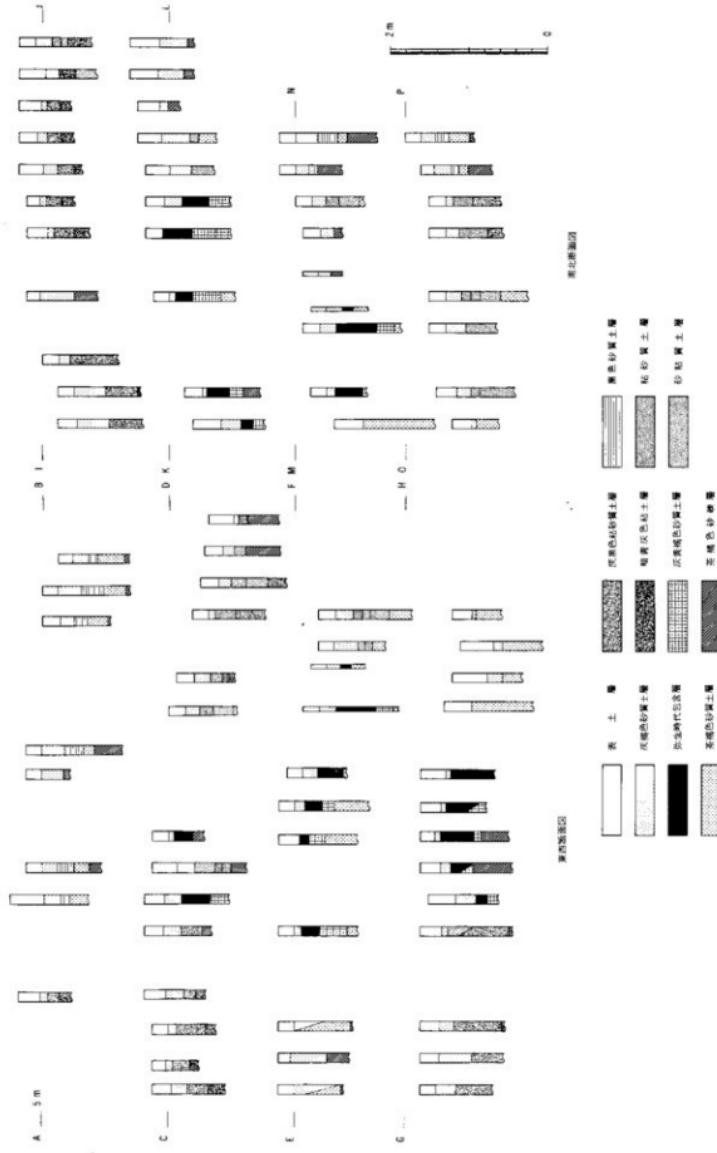
図 版

安瀬川流域の主要道路

1. 駒形街道
2. 墓ヶ谷街道
3. 竹森山街道
4. 桑原山街道
5. 朝井街道
6. 伊勢井街道
7. 清水西街道
8. 北郷街道
9. 上北郷内街道
10. 日奈木1号古道
11. 寺ヶ谷古道
12. 高柳古道
13. 高柳街道
14. 上町街道
15. 桐原街道
16. 鎌谷街道
17. 大原古道
18. 大久保街道
19. 大分御牛生坂
20. 幸栄街道
21. 鎌谷街道
22. 鎌谷山古道
23. 大久保古道
24. 幸田A5号古道
25. 明合古道
26. 豊山1号古道
27. 豊山山古道

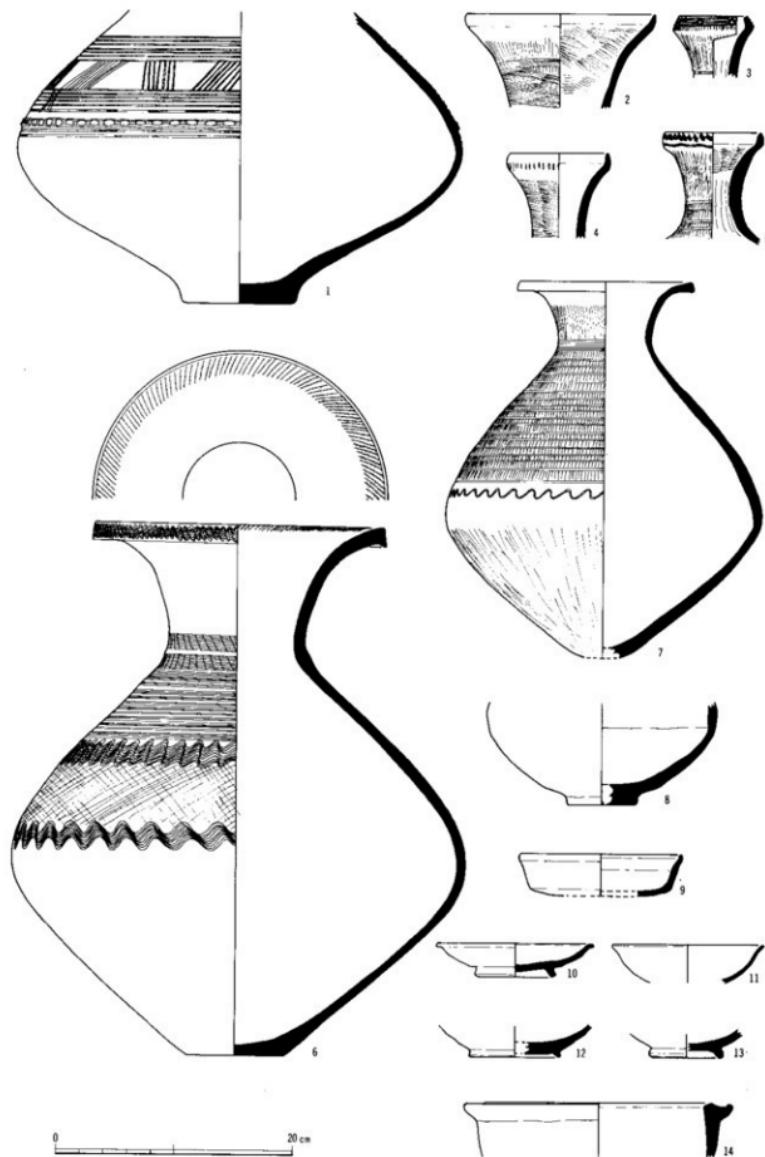




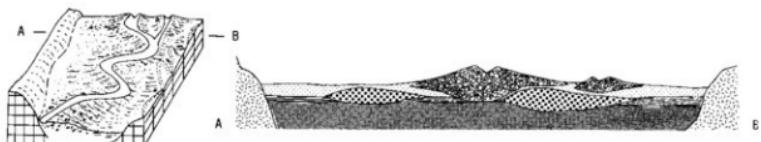
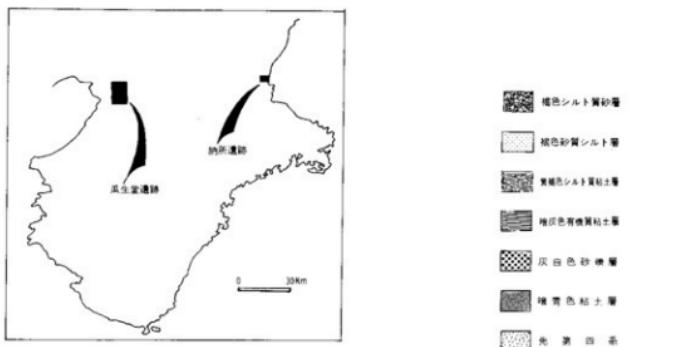


断面柱状図

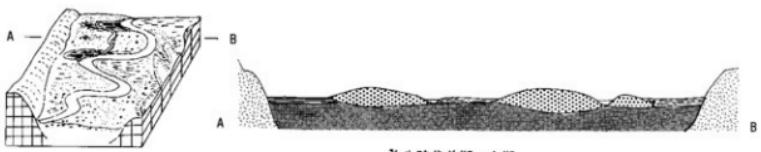




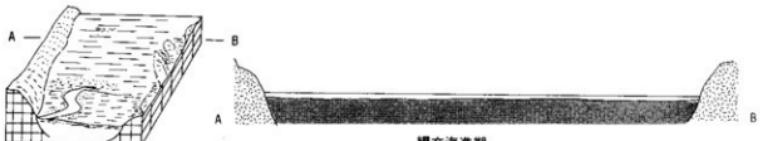
土器実測図



弥生時代後期以降

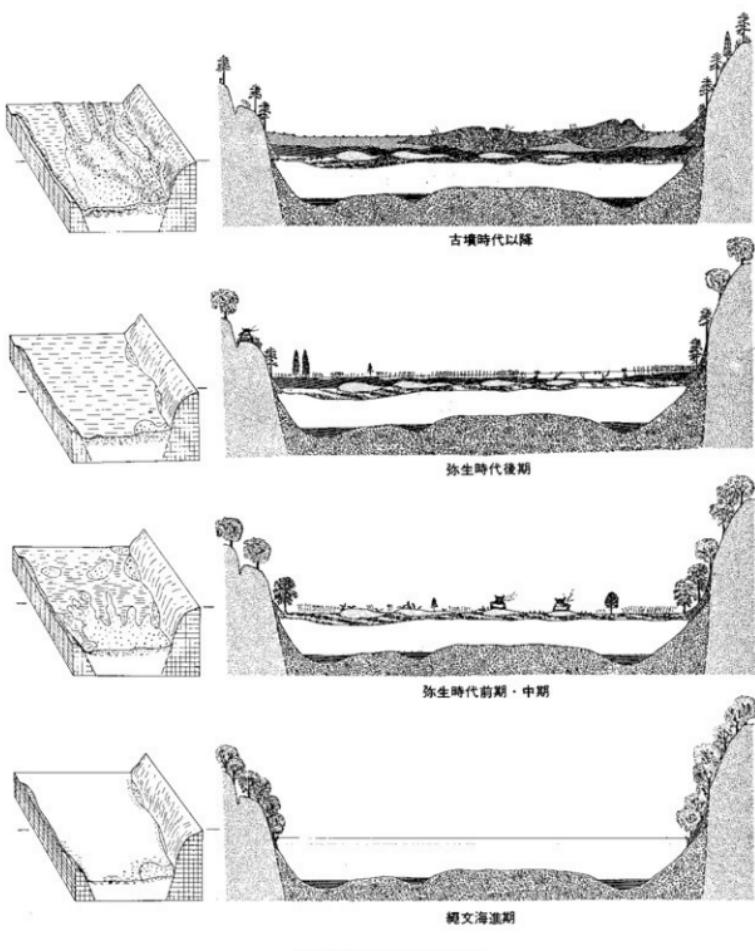


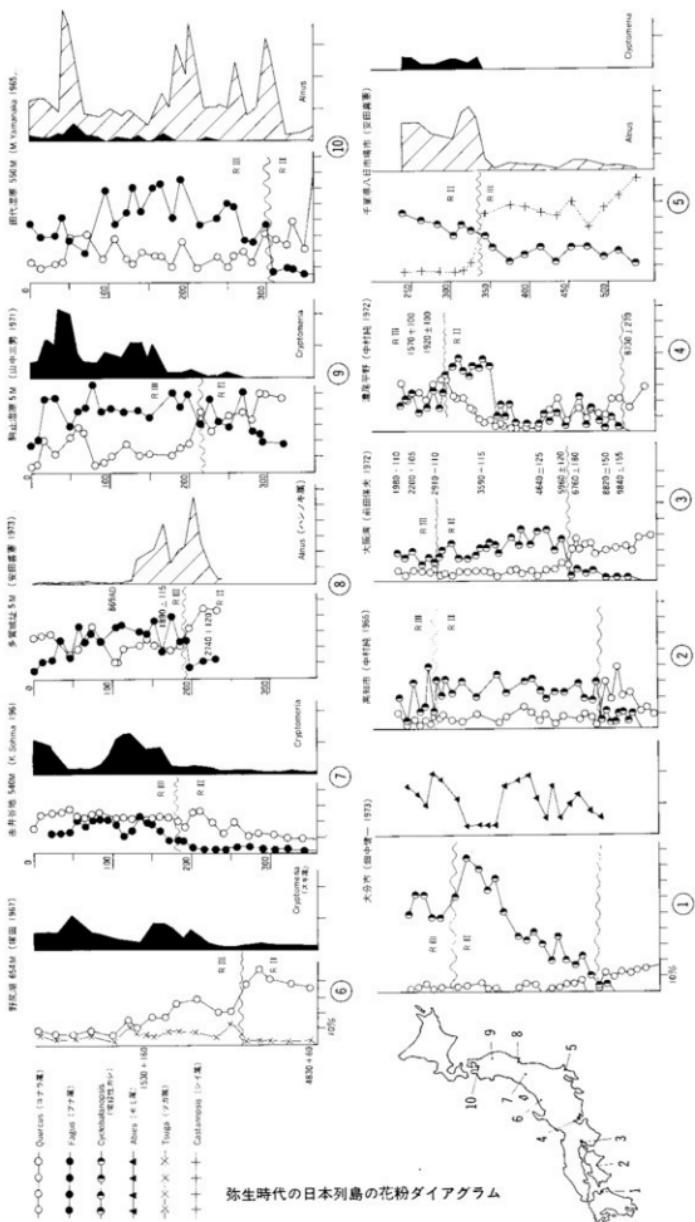
弥生時代前期・中期

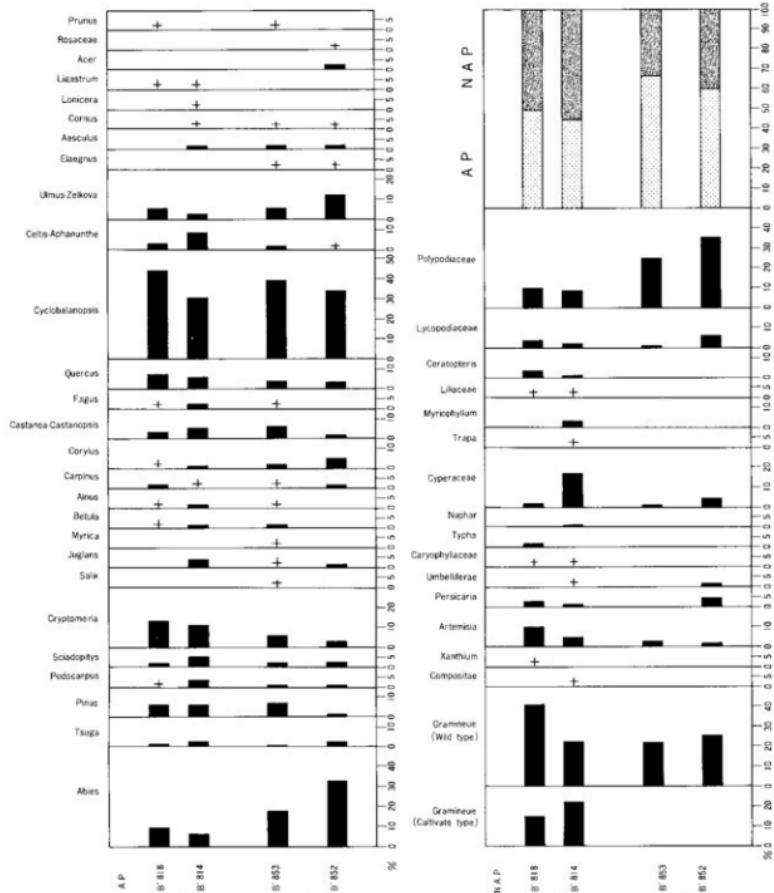


縄文海進期

納所遺跡周辺の地形変遷







故郷を離れて暮らす植物

故郷を離れて暮らす植物

故郷を離れて暮らす植物

故郷を離れて暮らす植物

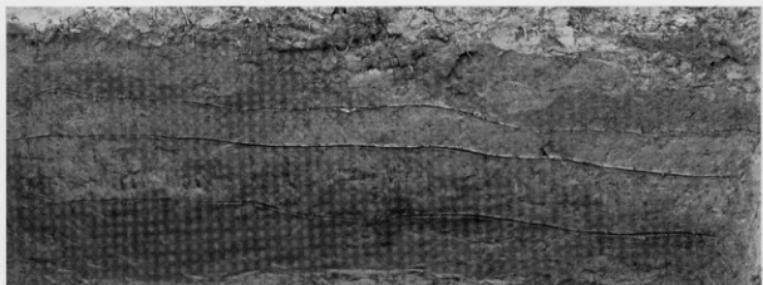
納所遺跡の花粉ダイアグラム



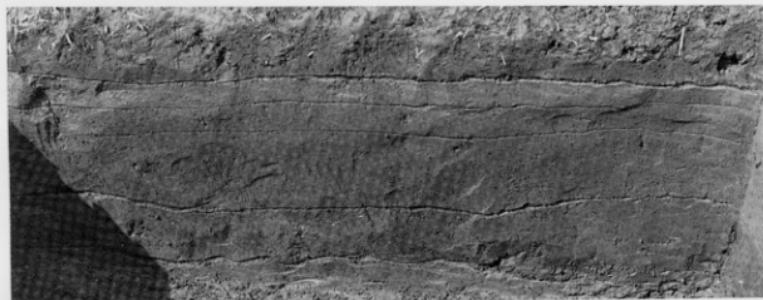
1. 調査風景（東から）



2. 調査トレンチ 3F—8—9 地点



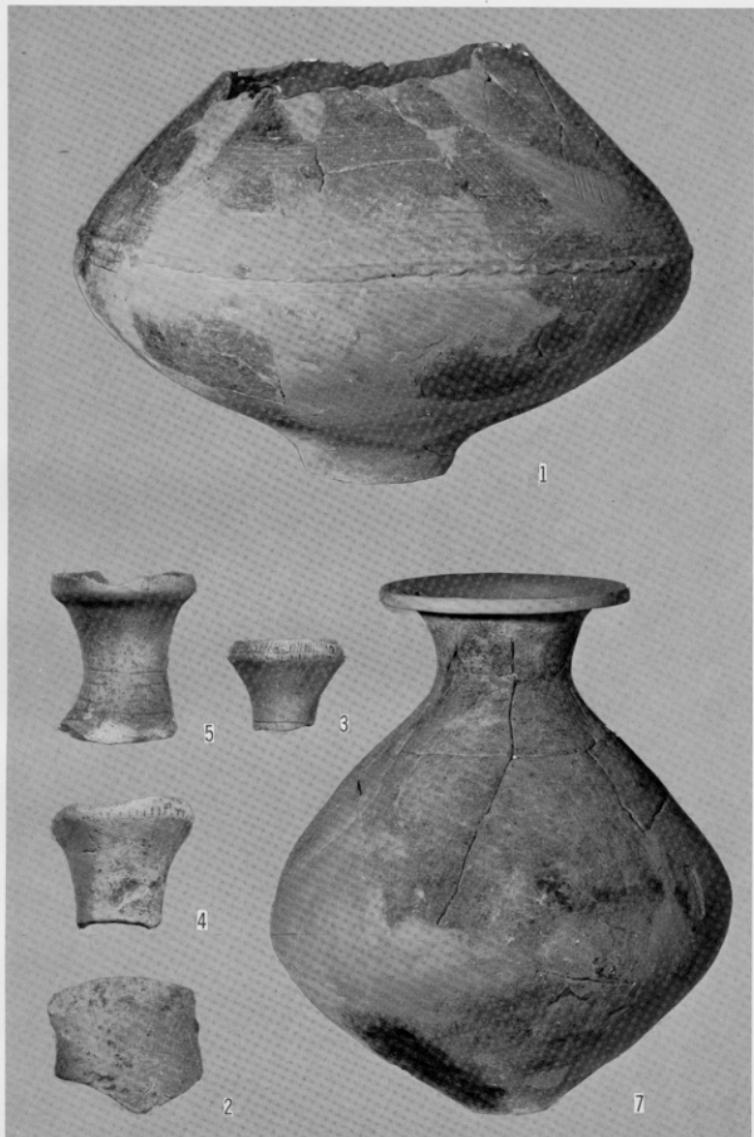
1. 8 E—8—15地点 東壁断面



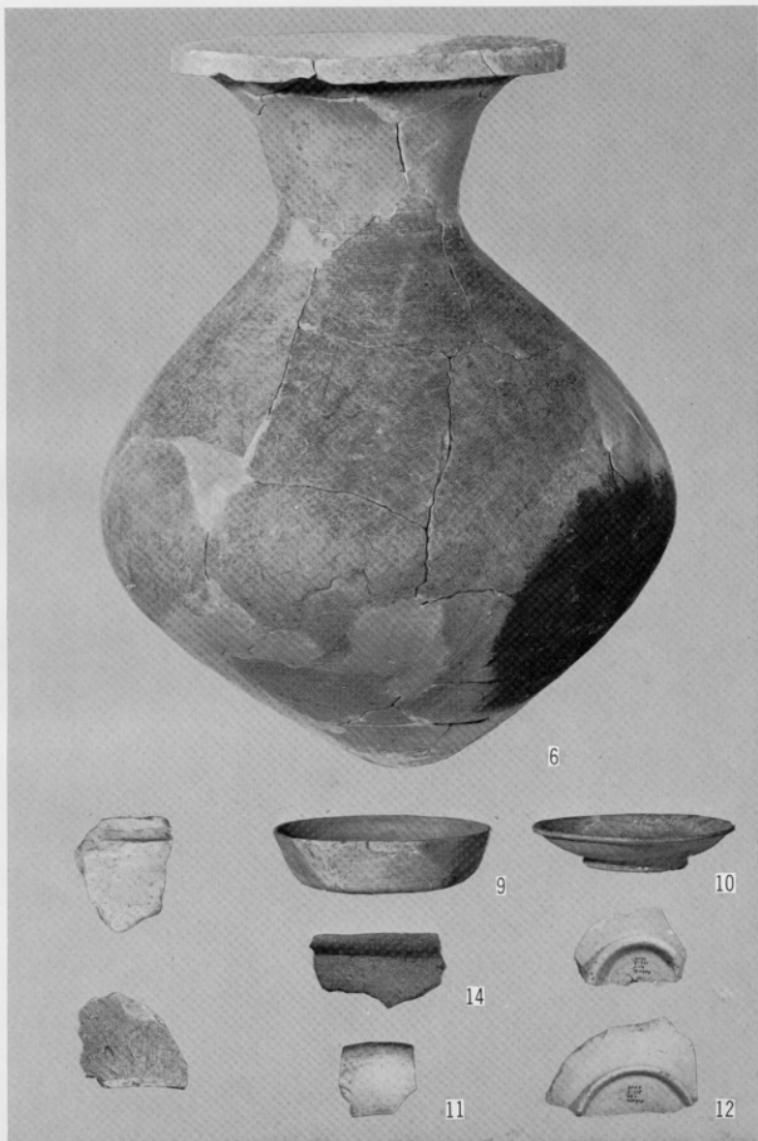
2. 3 E—23—5 地点 西壁断面



3. 3 F—24—5 地点 東壁断面



出土遺物



出土遺物

三重県埋蔵文化財調査報告27

納所遺跡範囲確認調査報告

1976年3月31日

編集 三重県教育委員会

印刷 三重県安芸郡河芸町上野2100
オリエンタル印刷株式会社